

【翻訳】

「捕虜収容所長 江本茂夫中佐（1888－1966）」増補改訂版  
*Camp Commandant Lt. Col. Shigeo Emoto (1888-1966)*  
付・「失われた日記」  
*The “Missing Diary”*

ナイジェル・ブラウン

*Nigel Brown*

川 口 好 孝 訳

訳者解説

はじめに

ここに訳出したのは、インターネットのホームページ（<<http://www.nigelbrown.me.uk/pow-emoto.htm>> 2021年2月24日閲覧）に掲載された「捕虜収容所長 江本茂夫中佐（1888-1966）」（“Camp Commandant Lt. Col. Shigeo Emoto [1888-1966]”）と題するナイジェル・ブラウン氏（Mr. Nigel Brown, 1950-）の筆になる記事（web article）の改訂版の一部である。

表題からも明らかなように、江本茂夫中佐は函館俘虜収容所長を務めた日本陸軍に籍を置く元軍人であるが、英語の語学将校として陸軍士官学校その他で教えた教育者でもある。その自在に駆使する速力のある英語は「マシンガン・スピーチ」の異名をとり、一世を風靡した。神奈川大学の前身である横浜専門学校では1936（昭和11）年4月から1941（昭和16）年7月までにわたって教鞭を執り、そのすぐれた手腕により学生の英語力の向上に貢献した。「発信英語」の実践に力を入れた英語演説の名手であり、学生に対する指導の成果はスピーチの分野において秀でており、「本邦英語界における奇跡なり」との評価を得、関係者に消すことのできない深い印象を残している。

N・ブラウン氏の記事では主に捕虜収容所長としての江本中佐の功績に焦点を当て、その美挙を賞賛すると同時に、コントラストをなすわが国の旧軍における暗部を摘出している。ところで、改訂前の前出の記事につい

ては『神奈川大学史紀要』第2号（2017年3月刊）においてその翻訳を掲載しており、今回の訳出に際しては重複を避けるため、新たに書き起こした前書きと後書き、本文中の改訂箇所は別として、改訂前と内容的に変わらぬ原形をとどめた部分についての掲載は割愛した。改訂前の訳については神奈川大学学術機関リポジトリにおいて閲覧可能であり、また、改訂部分の英文のオリジナルテキストを本紀要に掲載しているので、併せてご参照いただければ幸いである。

なお、参考までに、改訂のきっかけとなる出来事について同氏が記した「失われた日記」(The “Missing Diary”) (<<http://www.nigelbrown.me.uk/pow-1944-45.htm>> 2021年2月24日閲覧) という表題の一文の拙訳を併録した。

## 1. 失われた日記の発見

改訂のきっかけとなったのは第二次世界大戦中に戦争捕虜となった父君のダニエル・ラルフ・ブラウン氏 (Mr. Daniel Ralph Brown, 1922-1990) から譲り受けた函館での抑留生活を記録した日記にとって決定的に重要な意味を持つことになる新たな局面の展開が見られたことであり、具体的には、N・ブラウン氏の呼びかけに呼応して新たに発見された父の日記をもとに欠を補い、誤りを正す必要が生じたことによる。「極東捕虜日記」(“Far East Prisoner of War Diary”) と称するこの日記にはもともとジョン・ロック (John Locke, 1632-1704) の著した『統治二論』(*Two Treatises of Government*, 1690) 同様、欠落した部分があり、そうした瑕疵にもかかわらず、その重要性が失われることはないというものの、気になる空白を埋めるべく、失われた部分を見つけ出すことに努力が払われてきた。しかし、手を尽くして究明に当たったものの、その作業は予想以上に難航し、その所在と、欠落自体が何によって生じたものなのか、その理由については皆目わからずじまいだった。せめて、父の存命中にその所在について尋ねるなり、何なりして明らかにしておくべきだったのであるが、それも今や詮すべのないこととなり、後悔だけが後に残ることになった。

ところが、待てば海路の日和あり。思わぬところから吉報がもたらされることになる。情報の提供者はローラ・フォスター (Laura Foster) という名の女性で、行方不明になっていた日記は彼女と親族の手によって終戦以来大切に保管されてきたのであった。第二次世界大戦下の時代の影響が

まぎれもなくその痕跡をとどめている——それゆえ、授業教材としても価値のある——日記の記載事項を手掛かりに調査を進め、インターネットを活用した検索の結果、ローラはN・ブラウン氏の開設したウェブサイトに辿り着いたわけであり、今回のケースはそれまで考えられなかった、ネット社会のもたらす恩恵のもとで可能となる問題解決の新たな形を示すものとなった。

問題はなぜローラの祖父のアルバート・ジョージ・キーズ軍曹（Sergeant Albert George Keys）が失われた日記を所持していたのかということである。イギリス海軍に所属し、捕虜の日本からの撤退や戦犯裁判、あるいはそのどちらかに関わっていたと思われる点を除けば、ローラの祖父とナイジェル・ブラウン氏の父との間に直接の接点は見当たらない。それでは、どのような経過を辿ってローラの祖父は日記を入手するに至ったのであろうか？ 二人が接する機会は果たしてあったのだろうか？ このことは依然未解決の解明を必要とする課題として残されている。とはいえ、ローラからの吉報が日記の空白を埋める大きな前進をもたらしたことは確かである。

## 2. 日記に記された模範的行動と人道的行い

ところで、新たに発見された日記の執筆に充てられた期間は、時期的に江本中佐が函館俘虜収容所長の任にあった期間とも十分重なっており、われわれはこの日記の中で、D・ブラウン氏の江本中佐への言及に初めて接することができるわけである。日記では江本中佐についてただ名のみ記されているというのではなくて、一步踏み込んだ人間観察に基づいた正確な人物描写がなされており、その言動について好意的に語られている。したがって、江本中佐との関連で見た場合、中心を占めることになる日記の部分が見つかったことは大いに歓迎すべきことであり、これにより、すべての日記が揃うと同時に、借り物でない父の言葉によって江本中佐について語ることが可能になったわけである。このことを受けて、N・ブラウン氏は新たに発見された日記をウェブサイト上に公開するとともに、改訂版でも日記の成果を取り入れて、父の視点をできるだけ反映することに努め、必要な箇所を抜き出して積極的に引用することで、父の目から見た江本像に肉薄している。かくして、われわれとしては日記からの引用を通して、江本中佐が捕虜を前に見せた素顔のままの本然の姿を垣間見ることができ

るわけである。

わけでも N・ブラウン氏は父の日記に記された江本中佐の開明的な態度と人道的な行いに改めて注目している。こうした江本中佐の態度は軍国主義的色彩が濃くなる一方の日本国内では異端視されたが、しかし、国際世論は江本中佐に味方した。例えば、海外のある新聞記事は、それまで野蛮な待遇と困苦欠乏との生活を強いられてきた捕虜たちにとって開明的な江本中佐の所長就任こそはその生活を根本から改善し、前途に光明を与えるものであり、戦争という奈落へ向かう極限状況のもとで彼らに対して中佐の果たした役割を、航海の安全のためになくてはならない<sup>あらうみ</sup>荒海の灯台にたとえて、収容所を正しい方向に導くための指針となるべく努力した所長としてのその模範的行動と人間的な大きさを大いに賞賛している。江本中佐に対する当時の評価は、このように日本の内と外では異なっており、際立った対照を見せている。

### 3. 危機のさなかにあってなされた比類なき貢献

ところで、歴史的に見てもスペインの無敵艦隊アルマダがリスボアを出港してイギリスに向かったという知らせや、ナポレオン戦争期の1797（寛政9）年に起きたフランス兵のウェールズ上陸に端を発するフランス軍侵攻による危機の到来を告げる誇張された風聞は、いずれも人心を著しく動揺させ、イギリス国民をパニックないしそれに近い状態に陥れずにはおかなかったという。特に前者の場合に引き起こされた恐慌状態についてはイギリスの哲学者であり、政治学者だったトマス・ホブズ（Thomas Hobbes, 1588-1679）が自叙伝の中で述べている。それによると、当時イギリスは先進国のスペインと海上における覇権をめぐって争っており、ホブズの母は無敵艦隊襲来の報を聞いて、恐怖のあまりホブズを未熟児のまま産み落としたとされる。この事実をもとに、彼が、だから私は生まれつき「恐怖と双生児」なのだと言っていることは、人口に膾炙した有名なエピソードである。

イギリスの南岸に姿を現したスペイン艦隊とこれを迎え撃つイギリス艦隊との間で「アルマダの海戦」が行われ、スペイン側が敗北したのが1588（天正16）年8月のことであり、ホブズが生まれた4月5日には艦隊はまだリスボアを出帆していなかったが、威風あたりを圧する大国スペインがイギリス侵略の機会を虎視眈々と狙っているといううわさは、それだけ

で人々を震撼させるに十分であり、前年の12月には、無敵艦隊イギリス海峡に現るの知らせを信じた沿岸都市の住民の避難騒ぎが起こっている。かくして、人々は誤報であったとはいえ、無敵艦隊の影におびえ、身の安全を図るためにうわさがつくりだした敵艦の幻影に振り回されることになったのであった。

ここで思い出されるのは、第二次世界大戦末期に実行に移された函館俘虜収容所の監督下にある戦争捕虜の北海道内陸部への移送計画である。同収容所の場合においても危険を事前に察知し、難を逃れての場所の移動であったという点で、同じ行動パターンが再現されている。洋の東西を問わず、危機の発生ないし身近に迫りつつあるその可能性に直面して、その対応として判で押したように同じ行動がとられていることは興味深い。敵からの艦砲射撃を受ける恐れがあったことから、函館俘虜収容所の場合には、危機管理の一環として江本所長退任後の1945（昭和20）年6月7日に先手を打って、収容所の指揮系統は函館市に残したまま各施設を比較的安全な内陸部の空知地方へ移転することが行われている。

捕虜の身の安全の確保という点では、かかる人命重視の措置をとったことは確かに正解であった。というのは、函館は艦砲射撃こそ免れたものの、移転が完了した後の同年7月14日に空襲に遭い、函館俘虜収容所第一分所のあった室蘭は北海道を代表する工業都市であり、重要な軍需工場があったため、そのことが災いして攻撃目標とされ、同年7月14日に行われた空襲と翌15日の艦砲射撃によって大きな被害を受けることになるからである。戦況は逼迫し、わが国が窮地に立たされていることはもはや明らかだった。

したがって、アメリカ海軍艦艇が日本列島沿岸部に接近しており、本土決戦の可能性がささやかれる破局の予兆のさなかにあって誰もがナーバスになり、晏如たり得なかった時に、おのれを見失うことなく、強固に意志的に振る舞い、日本や世界の大勢を冷静かつ正確に把握して、常に的確な指示を与え続けた江本中佐の見識は驚嘆に値する。

#### 4. 「捕虜の権利」について

特に江本中佐において見るべきは、戦局が悪化する中で持ち前の語学力と国際情勢にも通じた高い見識に基づいて「捕虜の権利」を最大限保障し、取り締まりを強化するよう命ずる軍部の指導方針に阿諛追従<sup>あゆついしょう</sup>することなく、人道的立場を終始貫いたことであり、現存する多くの記録がこのことを立

証している。捕虜についてはその人格および名誉を尊重せらるべき権利を有することが1949（昭和24）年ジュネーブ第三（捕虜）条約において定められているほか、それ以前にも、捕虜の待遇については1899（明治32）年に採択され、1907（明治40）年に改定されたハーグ陸戦規則や1929（昭和4）年のジュネーブ捕虜条約（1949年改定）などで詳細に規定されている。特に捕虜に一定の人道的待遇を保障すべきであるとする見解はフランス革命以来人権思想とも結び付いて優勢になっており、江本中佐はこうした流れに沿って戦時国際法を遵守し、捕虜を人道的に扱い、苦渋に満ちた異国での抑留生活で苦を負い、難を負うことによって疲弊した彼らに救いの手を投げたのだった。江本茂夫は「北海道で何百人もの命を救うのに貢献した人物である」というフランシス・J・マレー（Francis J. Murray, 1912-1993）軍医少佐の言葉はこのことを裏付けている。

「捕虜の権利」は歴史上さまざまな場面において行使されており、よく知られているところでは、第7代アメリカ合衆国大統領のアンドリュー・ジャクソン（Andrew Jackson, 1767-1854）がアメリカ独立戦争（1775-1783）に少年兵として従軍し、捕虜となった際に、ブーツをみがくよう命ずるイギリス軍将校に対して、「捕虜の権利」を盾にその不当な要求を退け、その非を強く抗議している。ただし、その代償として相手側の怒りを買ひ、その時斬り付けられて刀によって左手と頭に負った傷痕は生涯消えずに残ったという。このように、この法的権利そのものは、戦争という特殊な限られた条件下で発動される権利であるとはいえ、欧米においては古くからその存在と意義が高唱せられていたことは異論のないところである。

ところが、この権利は第二次世界大戦中、わが国ではごく一部の識者を除いてその本義について理解されることはほとんどなかったようである。また、たとえ理解されたとしても、日本は捕虜の保護について定めたジュネーブ条約には批准していないという理由で、物資の欠乏が激しさを増すとともに国際慣行を等閑に付した方針がしだいに打ち出されるようになる。さらにまた「生きて虜囚の辱めを受けず」という戦陣訓が、日本兵にも同様に適用されるであろう国際的に認められていた「捕虜の権利」の形骸化に拍車を加える要因になったことは否めない。

収容所の施設設備面における改善に加えて、江本中佐の功績について語る場合、いま一つ見落としてはならないのはこうした捕虜の待遇をめぐる彼我の見解の相違を前にして問題の解決に向けて、その溝を埋める融和点



を見いだすべく奮闘努力したことである。その具体的方法として、衛兵や看守に捕虜に対する体罰を禁じ、公正に処遇するよう厳命するとともに、捕虜に対しても話に耳を傾けるだけでなく、日本と欧米の慣習やしぐさ、生活様式の違いについて説明し、誤解を招く行動をとらぬよう説得に当たっている。また、意思の疎通を欠くことから生ずるトラブルを解消し、相互理解を深めるために、後に『ジンジャー・ツリー——愛と追憶の日本』（*The Ginger Tree*, 1977）の著者として知られることになるオズワルド・ワインド（Oswald Wynd, 1913-1998）の協力を得て捕虜のための英和辞書づくりに取り組んでいる。

## 5. 語り継がれる人間的魅力と業績

ここで留意すべきは、江本中佐の人となりと業績が今なお語り継がれ、新たな広がりを見せていることである。例えば、N・ブラウン氏は2018年3月19日にリーズ大学で“Future Memories: Where Next for Far East Prisoner of War Studies?”をテーマに開催されたRFHGワークショップ（Researching FEPOW History Group Workshop）において江本茂夫中佐についてプレゼンテーションを行い、硬派一点張りでないユーモアを備えたその人間的魅力について語るとともに、暴力が日常茶飯事に行われていた日本軍の中にあって例外的な、知られざる人道的捕虜取り扱いが行われていた事例として報告を行っている。この新しい視点を示した報告の中で、同氏はリベラリストという点にかけては人後に落ちない好人物であり、軍人としては異色の存在であるにもかかわらず、職業軍人であったことから、江本中佐同様公職追放の悲運に見舞われ、逆境に負けずに江本塾を主宰して英語教育に当たった江本に対し、晩年は活動範囲を大きく制約される中、近隣の子供たちの教育に熱意を傾けた人として、井上成美（1889-1975）海軍提督の事例を挙げ、「第二の江本」なるキーワードを設けて、江本中佐と重ね合わせてこの「最後の海軍大将」として知られる人物について紹介している。ちなみに、両者は英語だけで授業を行うダイレクト・メソッドの採用を提唱していることでも知られている。なお、N・ブラウン氏は、抑留生活について口を閉ざしてほとんど語ることのなかった父だけれども、その代わり貴重な日記を残してくれたことを感謝し、現在、父の日記を中心に当時捕虜が置かれていた状況について関連資料をもとにまとめており、その成果を梓に上せることを目標に準備を進めておられる。この成果はま

もなく刊行される予定である。

2017年10月にはポール・マレー氏 (Mr. Paul Murray) が江本茂夫は「北海道で何百人もの命を救うのに貢献した人物である」という父の言葉に信を置いて、父の足跡を辿るため北海道の地を訪れている。フランシス・マレー軍医少佐は捕虜となった3年半の間妻への手紙の形で260ページあまりの日記を記している。この日記の内容はテレビ番組の中で紹介されており、それによると、江本中佐はとても寛容な人物 (very liberal man) で、口癖は「上等」(‘joto’ [good]) だったとされている。かくして、われわれはこの日記からその所作に示された江本中佐の特徴について知ることができるわけである。道内各地を訪れた旅の体験と父の日記をもとに、P・マレー氏もまた次の世代に父の体験を伝えるべく本を執筆することを計画しており、その抱負について語っている。なお、同氏はF・マレー軍医少佐の長男で、『神奈川大学史紀要』第2号で言及したカール・マレー氏 (Mr. Carl Murray) はその弟に当たる。

最近出版された書物についていうと、管見の限りでは、阿部菜穂子氏が自著の注の中で、戦後、かつて捕虜であった幾人かの人たちが江本中佐から受けた親切に対してお礼を言うために中佐とご子息の進氏のもとを訪れて、感謝報恩の誠を尽くしていることを指摘しており (See Naoko Abe, ‘Cherry’ Ingram: *The Englishman Who Saved Japan’s Blossoms*, Vintage, 2020, p.354)、この記述はN・ブラウン氏が記事の中で述べていることとぴったり符号する。

## おわりに

以上、見たように、江本中佐に対する関心は失われるどころか、さまざまな場面でその功績が話題として取り上げられることも少なくない。軍人と教師の二つの経歴を閲した江本中佐ではあるが、横浜専門学校では英語の名教師として令名を馳せ、人格教育の確立にも献身したほか、捕虜収容所長時代にはイギリス軍捕虜から「オックスフォードのプロフェッサー」という敬称で呼ばれていたことから察せられるように、教育に注ぐ力は殊のほか強かったといわれる。こうした経歴を持った人物であったからこそ、「捕虜から敬愛された捕虜収容所長」になり得たのだろうし、今なおその生涯と業績について語り継がれる人間的な魅力を備えているのであろう。すでに思い出の中の人になってしまった江本中佐ではあるが、その



人道的行いは過去に大いに成すところがあったというにとどまらず、さまざまな形で残されたその遺業と教えは清算さるべき過去の問題として風化することなく、今なおあるが如く、われわれに多くのことを語りかけてくる。

なお、日記の中で江本中佐について Col. Emoto というふうに肩書を略記している箇所があるが、訳出に当たって正式の肩書である中佐に統一して訳した。また、明らかに誤記と思われるものについては正しい綴りに直して表記した。ところで、改訂前の記事について訳した際、Peter V. Russo という人名をピーター・V・ルッソと表記したが、当時はピーター・V・ラッソーと表記されていたようである。同じく、改訂前の記事の中で引用されている1943（昭和18）年4月18日付のD・ブラウン氏の日記に Changi という地名が出てくるが、これを誤って上海と訳している。正しくはチャンギで、シンガポールに所在するかつて日本軍の捕虜収容所であった場所である。誤りの訂正を含め、気付いた点をここに付記させていただく。

## [翻訳①]

ナイジェル・ブラウン

「捕虜収容所長 江本茂夫中佐（1888-1966）」

（増補改訂版加筆部）

### <前書き>

ここに掲載したのは、2013年に執筆し、このウェブサイト上に最初に公開した人物評伝に加筆修正したものである。今回行ったのは大幅な改訂ではないが、それでも中佐が傘下に一群の収容施設を擁する函館俘虜収容所の所長を拝命し、その職務を開始した日付について訂正を加えている。このほか、私の父のダン・ブラウン（Dan Brown）の3冊ある極東捕虜日記のうち、2冊目からいくつかの引用を行い、本文に書き加えた。この2冊目の日記の網羅する執筆期間は1944年1月から1945年8月までのスパンに及んでおり、したがって、江本所長の在職期間は優にその中に含まれている。

今回の改訂に当たって、私は江本中佐の人を思いやる心がなさしめる、善をなさんと欲して圧倒的にプラスの好ましい方向に作用する——人命を救うことにさえ与って力のある——影響力についてますます確信を深めるようになった。だからといってこのことは、その行状において虐待や犯罪行為が蟠踞した大日本帝国陸軍の中であって、江本は孤独な声同然であったとする私の結論の信憑性を損なうものではない。だがしかし、この改訂版により、江本の遺業についてより完全な全体像が示されるようになることは確かである。

とりわけ心惹かれるのは収容所からの撤退が間近に迫った最後の時期に、元捕虜たちのためにトラック1台分のビールを手配して、差し入れを行った江本の人間味あふれる一面であり、もちろん——結局、このことが物議を醸すことになるのであるが——収容所で采配を振るう江本の教化洗練された、事に当たる際の開明的な態度もまた、同じように、私の心を捉えず

にはおかない。1945年8月24日付の私の父の日記の言葉を引用すると、以下の如くである。「この先まだ残されている日本滞在中のわれわれの生活の安危に関わることの管理は、今や江本中佐の手に引き継がれている。日本人の所長の中で江本に優る人物はおそらくいないだろう。江本なら、函館に移動する時も、われわれの苦になるところか、それが愉快な時となるよう最善を尽くしてくれるだろう。思うに、以上が私も含めた、捕虜全員の一致した意見である。この日の夕方、かつての所長による演説があり、ビール一瓶をまた4人で分け合って乾杯」

〔原文①〕

This is a revised version of the biography that I wrote and first published on this web site in 2013. The revisions are not extensive, but they do correct the start date I had for the Lt. Col.'s tenure as Camp Commandant of the Hakodate Group of POW Camps. Also, they add several extracts from the second of my father Dan Brown's three FEPOW diaries, that covers the period January 1944 and August 1945 and thus encompasses the Emoto period.

In making these revisions I have become increasingly convinced of the benign and overwhelmingly positive - even life-saving - influence of Lt. Col. Emoto. This does not detract from my conclusion that he was something of a lone voice amidst the generalised cruelty and criminality of the Imperial Japanese Army, but the revised version does give an even fuller picture of his legacy.

I am particularly drawn to the humanity of Emoto's commissioning of a truck load of beer for the ex-POWs in the final days before they were evacuated from the camp, but also of course, to his civilised - and controversial - approach to commanding the camp. To quote my father's own words, on 24 August 1945, "Col. Emoto has now taken over control of our welfare during the rest of our stay in Japan. I think and it is the general opinion of us all that we could have no better Japanese official and that when we move to Hakodate he will do all in his power to give us a good time. A speech this evening by the old Commandant, another ¼ bottle of beer for a toast."

## [翻訳②]

「捕虜収容所長 江本茂夫中佐（1888-1966）」（増補改訂版）  
本文

本文中の加筆部分および改訂箇所は次のとおりである。なお、加筆部分において改訂前の文章がそのまま使われている場合は、該当箇所をイタリックで示した。また、改訂箇所については【改訂前】と【改訂後】の文章の訳を並べて、異同を示した。なお、段落ごとに区切り、対照用の番号を付した。江本所長就任の日付について修正が行われている箇所は、「正しい日付（←修正前の日付）」のように←印で示した。

## 翻訳②-1

## 【改訂前】

江本は横浜専門学校の英語主任教授になった。

## 【改訂後】

江本は横浜にある神奈川大学の前身である横浜専門学校の英語主任教授になった。

## 原文（改訂後）②-1

Emoto became Senior Professor of English in Yokohama College, the predecessor of Kanagawa University in Yokohama.

## 翻訳②-2

次いで、1944年3月（←1943年）、江本は函館俘虜収容所長に任命された。この異動は、捕虜の待遇の改善を目的に浜田少将によって行われた人事の結果であった。戦時中の日記の中で、私の父のダン・ブラウンは次のように記している。「今月、新しい所長が就任し、この区域を管轄する任務を引き継いだ。江本中佐は英語に堪能な人物で、英文法だけでなく修辞技法一般にも通じていた。研鑽の結果、中佐はまた英国の生活様式についても精知していた。着任後直ちに捕虜たちに行った演説の中で、彼は自己紹介を行い、その安危を含め、自らの内なる関心が英語国民に向けられている

ことを説き明かし、さらにわれわれのこの収容所を日本一の収容所にするためにいかなる労も惜しまぬつもりであると宣言した。彼は、そのためにはもちろん、収容所内の一人ひとりの協力が必要であると語ったが、彼の意図は他でもないわれわれの生活をより良くし、快適なものにすることにあるのだから、それによって恩恵を被ることになるわれわれからの全面的協力を得られるものと確信していた。

#### 原文②-2

Then in March 1944 he was assigned as Commandant of Prisoner of War Camps in Hakodate, a move to better the treatment of prisoners by Major General Hamada. In his wartime diary my father Dan Brown notes: “A new commandant took over control of the area this month. Lt. Col. Emoto is well up in the English language, both in grammar and general figures of speech. He has also studied the ways of living in England. He introduced himself soon after his arrival in a speech to the camp, when he explained his interest in the English-speaking peoples and told us that as far as was in his power he would make this camp of ours the best in Japan. He said of course that he would need the co-operation of everyone in the camp, but as this intention of his was to benefit our own lives and comfort he felt sure we would give him our full co-operation.

#### 翻訳②-3

その日以来、収容所内においてさまざまな改善が行われたことは誰の目にも明らかだった。看守は以前よりわれわれに対して友好的となり、少なくとも「殴打」（“beating up”）はびたりとやんだ。同様の変化は労務派遣先の日本人スタッフにも見られた。このことは、言うまでもなく大いに歓迎すべきことであり、収容所内でも労務派遣先でも、次の瞬間には「殴られる」（“bashing”）のではないかという不意打ちの恐怖にびくびくせずにすむということは、それだけでもう大きな光明なのであった。中佐は下士官と将校を筆頭に、収容所の捕虜全員との面談を開始している。面談の際に出された数多くの要求は実現されているが、ただし、要求に応じられない場合は、その理由について十分納得のゆく説明が行われている。どんな

些細なことでも、面談を希望して中佐を訪ねて来る者のためにオフィスもまた開いたままにされている」

#### 原文②-3

“From that day we noticed various improvements in the camp. The guards are more friendly towards us, at least there are no more “beatings up”. The same with the Japanese at work. Needless to say this is a big thing to be able to go about the camp and at work without the fear of a possible “bashing” the next minute. The Colonel commences to interview the personnel of the camp commencing with the N.C.O.s and officers. A lot of requests made at these interviews are fulfilled and where it is impossible a suitable explanation is given. The office is also open to anyone who wishes to see the Colonel over any matter however trivial it may seem.”

#### 翻訳②-4

采配を振るようになってからわずか3カ月で事態の好転をもたらし、まわりの人々をあっと言わせた江本中佐の功績について、私の父は次のように記している。「ここに来てからのことを改めて振り返って現在と比較してみるならば、収容所の昨年との違いは歴然である。今ではわれわれの生活は以前よりもずっと楽になり、楽しさも増している。それに、仕事は相変わらず厳しく、労働時間もこれまでと変わらないけれども、それでも労働に従事する者全員の現在の健康状態からすれば、それは以前ほど耐え難いものではない」9月27日には、これとは別の小さなことだが、しかし重要な改善が行われたことについて、次のように記している。「今では母国へ便りを出すのに、1枚100語を限度とし、月に4枚のはがきを投函できるようになった」10月3日付の日記の中で、ダン（a Lt. Wynd）のことに触れ、察するところ、彼は所長自らが手掛けている書物の編纂に従事するためにやって来たときとみてもまず間違いないだろう、と述べている。この書物のことについてはここで述べられているだけで、その後、語られていないが、ここに登場する書物づくりの企画構想についてはさらに調べてみる価値がある。



原文②-4

Only 3 months after Colonel Emoto took command my father notes the beneficial impact that he brought about: “The changes in the camp from what it was last year are fairly evident if one takes the trouble to look back and compare things. Life is made much easier and pleasanter for us these days and although the work is just as hard and the hours as long as was the health condition of the men all making it more bearable.” On 27 September another small but important improvement was noted: “We are now allowed to write home four cards a month each of 100 words.” On 3 October Dan remarks that a Lt. Wyndes arrives in the camp from Miroran; apparently he came to work on a book by the Commandant. The book is not mentioned later, but this project is worthy of further research.

翻訳②-5

1944年12月25日に私の父は、「中佐の誕生日を祝う」ショーが夜の8時に催されたことに触れている。それから、父はこの一年を振り返って、次のように思いを述べている。「全般的に見て、今年は良い年であった。良い時も悪い時もあったが、一年を通じてわれわれ一同の士気はまったく申し分なかった。江本中佐の麾下<sup>きか</sup>で収容所関係者が態度を軟化させ、われわれの力になってくれたことも事実だけれども、当方の士気の高揚にとって主に与って力があつたのはわれわれのもとに届けられる郵便物や赤十字社からの救恤品であり、それらの恩恵によるところが大きい」

原文②-5

On 25 December 1944, my father notes that in the evening at 8 o/c a show was put on, “given in honour of the Colonel’s birthday”. Then, in reflective mood, he sums up the year in the following terms: “Taking things all round this has been a good year. It has had its ups and downs but the morale of the lads has been very good. Mail and Red Cross supplies have been mostly responsible for this although the Prison Authorities under Colonel Emoto have been very helpful towards us.”

## 翻訳②-6

とはいえ、どんな良いことにも終わりがある。1945年5月27日に父は日記に次のように記している。「そしてまた、所長の交替が行われた。昨日はお別れの挨拶があり、江本所長はこのことを念頭に、この日の〔仕事を〕早めに切り上げさせ、収容所に引き揚げさせたのだった」

## 原文②-6

However, all good things come to an end and on 27 May 1945 my father notes in his diary: “Also we have had a change of Commandant. Yesterday the old Commandant gave us a farewell speech, bringing us home early [from work] in order to do so.”

## 翻訳②-7

## 【改訂前】

捕虜であったジョー・ダン（Joe Dunne）とエリック・クーパー（Eric Cooper）は江本のことを良く言っている。ダンは、江本が1943年の3月に函館俘虜収容所長の任務を引き継いだ時、誰もがみな彼の完璧な英語と彼が捕虜たちの福利厚生に関心を抱いており、しかもそれが特定の利害によらぬ純粋な動機から発せられたものであることに深い感銘を受けたと述べている。（下線を施した部分は、改訂の際、削除）

## 【改訂後】

捕虜であったジョー・ダン（Joe Dunne）とエリック・クーパー（Eric Cooper）は江本のことを良く言っている。ダンは、江本が函館俘虜収容所長の任務を引き継いだ時、誰もがみな彼の完璧な英語と彼が捕虜たちの福利厚生に関心を抱いており、しかもそれが特定の利害によらぬ純粋な動機から発せられたものであることに深い感銘を受けたと述べている。

## 原文（改訂後）②-7

POWs Joe Dunne and Eric Cooper speak well of Emoto. Dunne relates that when Emoto took over as Hakodate Camp Commandant, the men were impressed by his flawless English and his genuine interest in the welfare of the prisoners.

翻訳②-8

【改訂前】

以上述べた記述のほとんどは1943年3月から5月にかけて行われた捕虜収容所の状態の改善について述べた私の父の記述の内容と一致する。

【改訂後】

以上述べた記述のほとんどは1944年3月から1945年5月にかけて行われた捕虜収容所の状態の改善について述べた私の父の記述の内容と一致する。

原文（改訂後）②-8

Much of this account accords with my father's description of improvements in camp conditions that took place in the period March 1944 to May 1945.

翻訳②-9

【改訂前】

1946年11月3日発行のワシントンの日刊新聞『星条旗新聞』（*Stars and Stripes*）は次のように報じている。「畠山の後任の、当時中佐であった江本茂夫は、彼と接するようになった多くの元捕虜たちから選りすぐりの人物として賞賛され続けている。連合国軍最高司令官法務局にファイルして保管された宣誓供述書は、江本の就任こそは「われわれの生活に光明をもたらすもの」であり、日本人の捕虜収容所員のなかでも『彼が指針となる傑出した人物として闇を照らす灯台のごとく屹立していた』ことを証言している」

【改訂後】

1946年11月3日発行のワシントンの日刊新聞『星条旗新聞』（*Stars and Stripes*）は次のように報じている。「畠山の後任の、当時中佐であった江本茂夫は、彼と接するようになった多くの元捕虜たちから選りすぐりの人物として賞賛され続けている。連合国軍最高司令官法務局にファイルして保管された宣誓供述書は、江本の就任こそは「われわれの生活に光明をもたらすもの」であり、日本人の捕虜収容所員のなかでも『彼が指針となる傑出した人物として闇を照らす灯台のごとく屹立していた』ことを証言している」私の父の場合はどうかというと、これはいかにも気乗りのしない褒め方であるというよりほかないのだが、3冊のノートに記された日記の

中で大日本帝国陸軍に所属する人物として唯一名前が出てくるのは江本中佐だけである。

原文（改訂後）②-9

The Washington daily newspaper Stars and Stripes, November 3, 1946, reported that: “Shigeo Emoto, then a lieutenant colonel who took Hatakayama’s place, has been singled out and praised by many former prisoners who came into contact with him. Affidavits on file with the SCAP Legal Secion testify that Emoto’s appointment “brightened our lives” and that “he stood out as a beacon” among Japanese prisoner-of-war camp personnel.” In the three notebooks that comprise his Diary the only member of the Imperial Japanese Army my father names is Lieutenant Colonel Emoto. This is faint praise indeed on my father’s part.

翻訳②-10

#### ＜望みうる最高の日本人捕虜収容所長＞

函館を追われた後、江本は労働部隊として日本に連れて来られた朝鮮の人々を監督する日本軍の北海道セクションに転属となり、戦争終結までの地位にあった。とはいえ、捕虜との接触を断つことを目的に行われた彼の左遷と転属は、完全に成功したとは言えないように思える。というのは、収容所が美唄（移転前は函館に所在）に移り、やがてそこでの生活も終わろうとする頃、江本は人々の前に再びその雄姿を見せることになるからである。収容所に到着した中佐は集まった人々を前に演説を行い、完璧な英語で、捕虜の立場にある者たちに受難の苦しみを与えずにはおかなかった禍々しい、ますます悪くなる一方の収容所の荒廃ぶりについて謝罪するとともに、捕虜に対して一般の人と同様の処遇をするよう（ほとんど姿を見かけなくなった）看守たちに命じたのだった。そして、「諸君、今この場で戦争が終わったことを諸君らに告げることは私にとって実に名誉なことであり、誠に光栄である」と述べて、演説を終えた。これに呼応して、イギリス人将校の音頭に和して、江本中佐をたたえる耳を聳せんばかりの万歳三唱が湧き起こった。

原文②-10

“we could have no better Japanese official”

After Hakodate Emoto was transferred to the Hokkaido section of the Japanese army that handled the Koreans imported as labour battalions and he remained at that post until the cessation of hostilities. However, it seems that his demotion and transfer away from contact with prisoners was not entirely successful for he turns up again in the last days of the Bibai (formerly Hakodate) camp group. He arrived at the camp and spoke to an assembly of the men. In perfect English he apologised for the awful and degrading conditions that they had suffered, he instructed the guards (who were hardly to be seen) to treat POWs as ordinary men and concluded: “Gentlemen, I have the honour and privilege to tell you, that the War has finished.” A British Officer called for three cheers for Colonel Emoto, which was deafening.

翻訳②-11

エリック・クーパーはこの出来事について次のように語っている。「私の脳裏には、身じろぎ一つせず直立の姿勢で威儀を正して立つ——孤高を貫く——日本人中佐の明快で優に妙なる凛々しさを持った立派な姿が、鮮やかな絵のように、今でもその時の光景をありありと思い浮かべることができるほど、はっきりと焼き付いている。それから、中佐の口から発せられた最後の一言が、余韻<sup>じようじよう</sup>嫋々耳に残っている。その時、中佐は「どの階級の者であろうとも、また、海軍や陸軍、空軍の如何を問わず、もし日本に来る者があれば、分け隔てなく、だれでも我が家では歓迎する」と語ったのだった」エリックはビールの配達のことや、江本が終戦ならびに1945年の8月中ごろに起こった出来事の顛末について人々に知らしめるために行ったスピーチについても詳しく語っている。

原文②-11

Eric Cooper says of this event: “In my mind I still have a clear and lovely picture of the Japanese Colonel – alone, but still proud – standing to attention. Then from him one last word, that whatever our Rank, whether Navy, Army or Air Force, if ever we returned to Japan, we

would be welcome at his home.” Eric also gives a detailed account of the beer delivery and Emoto’s speech to the men announcing the end of the War, events that took place in mid- August 1945.

#### 翻訳②-12

同様に、1945年8月24日に私の父は日記に次のように記している。「江本中佐の帰還。われわれの前所長がけさキャンプを訪れて演説を行い、4人に1本の割合でビールが配られ、乾杯した。本日、配給になった砂糖菓子を食べた。近い将来、バターや砂糖、それにビスケットの配給が行われることが望まれる。夕食（dinner）の献立はポート・シチューと新じゃがいもとグリーンピース、夜食（supper）はゆで卵一つ。〔…………〕」

#### 原文②-13

Similarly, on 24 August 1945 my father records in his diary: “The return of Col. Emoto. Our ex- Commandant visited the camp this morning and gave us a speech and a bottle of beer between four to drink a toast. Have had some sweetmeats issued today. Expecting butter, sugar and biscuits in near future. Port stew, new potatoes and green peas for dinner and a boiled egg for supper. Col. Emoto has now taken over control of our welfare during the rest of our stay in Japan. I think and it is the general opinion of us all that we could have no better Japanese official and that when we move to Hakodate he will do all in his power to give us a good time. A speech this evening by the old Commandant, another ¼ bottle of beer for a toast.”

#### 翻訳②-13

##### 【改訂前】

後に、彼は第一復員局の通訳翻訳官に任用されている。1966年、彼は77歳（原文「78歳」）の生涯を閉じた。

##### 【改訂後】

後に、彼は第一復員局の通訳翻訳官に任用されている。捕虜であった諸君が訪ねてきたら、我が家では歓迎するという言明を江本は忠実に守り続けた。その後、何人かの者は彼のもとを確かに来訪している。1966年、彼



は77歳（原文「78歳」）の生涯を閉じた。

原文（改訂後）②-13

Later, he was employed as an interpreter in the First Demobilization Board. He stayed true to his declaration that any ex- POWs would be welcome at his home, and some did visit him later. He died in 1966, aged 78 years.

翻訳②-14

【改訂前】

本稿を終える前に一言述べておきたいことがある。それは江本茂夫中佐を捕虜収容所長の模範と見なす見解が正しいものであり、——あらゆる証拠がこのことを支持しているとしても——、このことは、函館俘虜収容所での生活が耐えがたいものではなく、楽であったことを意味するものであると受け取ってはならない、ということである。実際はそれどころではなかった。

【改訂後】

本稿を終えるに当たって、繰り返しを厭わずいま一度述べておきたいのは、江本茂夫は「北海道で何百人もの命を救うのに貢献した人物である」という、やはり函館俘虜収容所の監督下で抑留生活を余儀なくされた極東捕虜の子息の語る言葉である。だがしかし、仮に江本茂夫中佐を捕虜収容所長の模範と見なす見解が正しいものであり、——そしてまた、膨大な数にのぼる証拠の山がこのことを支持しているとしても——、このことは、函館俘虜収容所において安楽な生活が日常的に行われていたことを意味するものであると受け取ってはならないということを、同時にここで付言しておかなければならないだろう。実際はそれどころではなかったのである。

原文（改訂後）②-14

In conclusion, I would repeat the words of another son of a Hakodate FEPOW, that Shigeo Emoto was “a man responsible for saving hundreds of lives on Hokkaido”. However, I would add that if the model commandant view of Lt. Col. Shigeo Emoto is correct – and a mass of evidence points that way – this should not be taken to mean that life

was ever easy in the Hakodate camps. Far from it.

## 翻訳②-15

### 【改訂前】

別の言い方をすれば、江本は誰も耳を傾けない孤独な声だった。確かに彼の考え方や教えは、配下の者たちになかなりの影響を与えたとし、少なくとも部分的には守られた。その成果は人々に認められもした。とはいえ、「模範的な行い」は少しも広まらなかったし、理解もされなかった。このことについては、戦後設けられた函館の将校や兵士による戦争犯罪を審理するための軍事委員会（ミリタリー・コミッション）が、捕虜に対する非人道的な扱いが日常茶飯事に行われていたことを立証している。

### 【改訂後】

別の言い方をすれば、江本は誰も耳を傾けない孤独な声だった。確かに彼の考え方や教えは、配下の者たちに影響を与えたとし、少なくとも部分的には守られた。その成果は人々に確かに認められもした。とはいえ、「模範的な行い」はあくまでもまれなケースで、それが実行されることはめったになかった。このことについては、戦後設けられた函館の将校や兵士による戦争犯罪を審理するための軍事委員会（ミリタリー・コミッション）が、捕虜に対する非人道的な扱いが日常茶飯事に行われていたことを立証している。

## 原文（改訂後）②-15

In other words, Emoto was a lone voice. His views and instructions undoubtedly had an impact on those who served under him, and were at least partially obeyed. The results were certainly recognised by the men. However, “model behaviour” was a rarity and the post-war military commissions into war crimes by Hakodate officers and soldiers are testimony to the widespread practice of inhumane treatment of prisoners.

【翻訳③】

ナイジェル・ブラウン

「捕虜収容所長 江本茂夫中佐（1888-1966）」  
（増補改訂版加筆部）

後書き

江本茂夫が函館俘虜収容所の監督下にある捕虜を前にして語った、もし諸君らの中に日本に来る者があれば、我が家では喜んで歓迎するという言葉に嘘偽りはなく、彼が後にこの約束をたがえずに実行したことをわれわれは知っている。何人かの者は江本のもとを訪れて、実際に、手厚いもてなしを受けている。1966年1月29日、彼は77歳（原文「77あるいは78歳」）で他界した。ご子息の江本進教授もまた、捕虜だった人の家族と対面することに特別の関心を持たれ、このことに熱意を傾けておられたが、残念ながら、2016年4月4日に東京で亡くなった。彼は父と同じ東京都八王子市高尾の墓所に埋葬され、永遠の眠りにについている。

原文③

Postscript

We know that Shigeo Emoto was as good as his word that if any POWs at Haodate ever returned to Japan they would be welcome at his home. Some took up his offer of hospitality. He died on 29 January 1966, aged 77 or 78 years. His son, Professor Susumu Emoto, also took a keen interest in meeting the families of former POWs; sadly, he died on 4 April 2016 in Tokyo. He is buried at the same cemetery in Takao, Hachioji City, Tokyo as his father.

## 付・[翻訳④]

## 「失われた日記」

2013年にこのウェブサイト上に父の日記を最初に公開した時、内容を入力するため筆者の手元にあったのは2冊のノートだけだった。父の日記は1943年12月28日付の記述を最後に、空白の期間があり、1945年9月1日の分から再びそれ以降の記録が書き継がれている。紛失した（missing）日記は1冊だけなのか、ほかにもまだ何冊か別のノートに書き記された日記があるのか——このことについて知る手立てとてなく、見当さえつかなかった。父から日記を受け取ったのは父が亡くなるおよそ2年前の1988年のことであり、その後長い間、私は日記の欠落部分のことについては気付かずにはいた。しかし、このことについて父に尋ねようにももう手遅れだった！ 空白の部分に当たる1年と8カ月の間に父がつけていたと思われる1冊ないし2冊以上のノートから成る日記がどこにあるのか、その所在は不明だったし、そもそもその間父が日記をつけていたのかも定かではなかった。とはいえ、この間に生じたくさぐさの出来事について、それが記録されていないとは私にはとても思えなかった。とりわけ1945年8月に行われた捕虜の解放の場合については、それが大きな出来事だっただけになおさらである。

2017年5月8日に問題は一気に解決した。事の次第はこうである。私はローラ・フォスター（Laura Foster）という名の心当たりのない女性から1通のメールを受け取った。メールには「あなたのお父さんの日記のうちの1冊が、私のところにあります！ 機会を設けて、この日記を是非あなたにお渡ししたいと思います。運命のいたずらというか皮肉なもので、私はウルヴァーハンプトン（Wolverhampton）に（それもコースリー〔Coseley〕に！）住んでいます。お会いして、お話しをすることを楽しみにしております、ローラより」とだけメッセージが書かれていた。その日のうちに私はローラと会い、本人から日記を受け取ったのだった（日記は1冊だけだった）。「行方の分からない」（“missing”）ままになっていた日記はローラ自身とその身内の者を含め3人の人物の手によって72年の間大切に保管されていた。まず最初に日記を保管していたのはローラの祖父のアルバート・ジョージ・キーズ軍曹（Sergeant Albert George Keys）で、フィリピンのマニラでイギリス海軍のコマンド隊員として従軍していた1945年

以来、日記が一貫して彼の手元にあったことはほぼ間違いない。次いで、祖父が亡くなってからは日記はその娘のうちの一人が保管を引き継ぎ、そして最後に、その姪のローラが16歳の時に学校の授業の課題で用いるために譲り受けることになったというのが事の真相である。どのノートにも父は自分の氏名と階級、それに自らの所属を示す番号を書いており、他ならぬこのノートに記されたイギリス空軍第1213899号（RAF number 1213899）という番号を手掛かりにローラはインターネットで検索を行い、その結果、このウェブサイトに辿り着いたのだった。

次に、この物語にまつわる少なからぬ偶然の一致について述べなければならない。第一に、ローラが住んでいるのは我が家からほんの5マイルほどのところであるということ、第二に、ローラの伴侶と私とは遠い親戚関係にあるということ、第三に、彼の母が私の友人の隣人で、生涯の友であるということ、である。私たちの知る限り、私の父とローラの祖父の間には一度も面識がない。しかし、本当に接点はないのだろうか。もちろん、このことはジグソーパズルを完成するために不可欠なもう一つの断片であると言ってもおそらく差し支えないであろう。ただし、それが果たしてジグソーパズルの欠落したまま見つからないピースであるのかどうかとなると、その見通しは神のみぞ知るところであって、われわれには何ともいえない。

さて、今や私の手元には1944年の1月から1945年の8月の期間にわたって私の父の手によって書かれた個人的な体験の記録が確かに存在する。けれども、2013年の時点ではこの記録がまだなかったので、他の日記や回想録等を代用して、「失われた日記」（“The Missing Diary”）と名づけた、あくまで代替的なウェブページを作成した。こうして、他の資料を再構成してまとめあげることで、父の動向や、父に影響を及ぼした主要な出来事のいくばくかについて理解することが私には可能となったわけである。今回説明のために書き起こしたこの前書きに当たる部文を除いて、ページは以前のままである。

最後に、「行方の分からなかった日記」（“Missing Diary”）を72年間手厚く保管して護り続け、快く返却してくださったローラと親類の方々に深

甚なる謝意を表する次第である。

原文④

### The “Missing Diary”

When I first published my father's diaries on this web site in 2013 I had only two notebooks to transcribe. His diary entry for 28th December 1943 was the last until 1st September 1945 when the diary resumed. I did not even know whether one diary was missing or perhaps more. My father had given me the diaries in 1988, some two years before he died, and I had not noticed the gap until some time after that. It was too late to ask him! I did not know the whereabouts of the one or more notebooks that he may have kept for the intervening 20 months, nor was I even for sure whether it was kept. However, I could not imagine that the events of those months, especially the liberation of the POWs in August 1945, went unrecorded.

On 8 May 2017 the matter was resolved. I received an email from someone previously unknown to me named Laura Foster, saying only “I have one of your Dad's diaries! I'd be pleased to arrange to give it to you. Ironically, I live in Wolverhampton (well Coseley!). Look forward to speaking to you, Laura”. I met her later in the day and she gave me the diary (there was only one). It had been “missing” but kept safe for 72 years by three members of her family, her grandfather Sergeant Albert George Keys who almost certainly had it in his possession from 1945 when he was serving in Manila, Phillippines as a Royal Navy Commando, then one of his daughters after he died, and finally it had passed to her niece Laura for use in a school project when she was 16. Inside each notebook my father had written his name, rank and number and it was that RAF number 1213899, that she used to search the internet and with which she found this web site.

There are a number of coincidences surrounding this story that should be mentioned; first, Laura lives only 5 miles away from me,



second, her partner is distantly related to me, and third, his mother is a neighbour and lifetime friend of a friend of mine. As far as we know my father and her grandfather never met, but of course that may be another piece of the jigsaw that we do not even know is missing.

So, now I do have my father's own written record of his personal experiences for that period, January 1944 to August 1945. However, in its absence in 2013 I produced a substitute web page called "The Missing Diary" from other diaries, memoirs, etc. These enabled me to piece together something of his movements and the major events that affected him. Apart from the addition of this explanatory preamble the page remains unchanged.

Finally, a big thank you to Laura and her family for looking after the "Missing Diary" for 72 years, and returning it.